

講師略歴

宮元三恵（みやもとみえ）

福岡県生まれ。1996年、アーキテクチュラル・アソシエーション・スクール（ロンドン）修了。2006年、東京藝術大学大学院美術研究科後期博士課程修了。子どもの身体感覚に基づくワークショップや動物の巣をモチーフにした空間制作など、空間の知覚や体験をテーマとする活動を国内外で展開している。東京工科大学デザイン学部・大学院デザイン研究科教授。

講師からのメッセージ

みなさんこんにちは！

今回のワークショップは、今年2月に実施した「国立国際美術館ってどんな建物？歩いて話して、みんなで一緒に考えよう！」の続編になります。国立国際美術館は、大人だけでなく子どもやお年寄りも利用する場所ですし、障がいがある人、日本語を話さない人など、様々な人が思い思いの時間を過ごす建物です。

2月のワークショップでは、いつもは絵画や彫刻を目的に訪れる国立国際美術館という建物を、大人から子どもまで参加して下さったみなさんと一緒に鑑賞することで、床の煌めきや、石のボコボコした感じ、すこしだけ曲線になっている壁の形、初めて登る階段の存在、一人になってほっとできるスポットなど、今まで気づけなかった国立国際美術館という建物の特徴を知ることができました。

私は目が見えるので、普段はどうしても目から入ってくる情報に頼って建物の特徴を考えることが多いですが、建物を知ったり感じたりするのは実は見ることだけではなく、触るとひんやりしたり柔らかかったりする場所もあれば、足音や声が響きやすい場所、風の匂いがする場所など、耳や鼻や手など体全体を使って建物を感じていることに改めて気づかされました。

そんな経験を経て、今回は特に見る以外の方法でこの国立国際美術館という建物を知ったり、感じたりするにはどんな方法がいいのかみなさんと一緒に考えたいと思います。ワークショップ当日は、こんな風に触れるミニチュアがあったらいいのでは？と考えて途中までつくった国立国際美術館のミニチュアを持っていきます。そのミニチュアをみんなで触ったり、建物をもう一度一緒に歩いたりしながら、どこをどんなふうに触れるといいのか、そもそもどんな形がいいのかなど、見えない人、見えにくい人だけでなく、見える人、いろんな方と、触ることで建物を知ったり感じたりすることについて一緒に考えられたら嬉しいです！